産業も生活も環境に配慮したまち

津波で砂浜が削られ、海岸の松林も流されました。海にはがれきが沈み、漁業への影響が心配されました。

しかし、ダイバーらの協力でがれきの撤去が急ピッチで進み、水質の安全性も確認されたことで養殖がいち早く始まりました。

植林のための苗木育てなど、子ども達が参加した自然復元の取り組みとともに、自然そのものの力強い回復力によって美しい自然を取り戻すことが出来ました。一時は閉鎖されていた海水浴場も今ではにぎわっています。「海の照葉樹林帯」も育って、近いうちに防潮林としての役割を果たしてくれるでしょう。

家を建てるときは地元の木が使われ、庭だけでなく建物にも植物があしらわれています。緑の少ない都会から、気仙沼の自然環境を貸して欲しいと言われ、「○○市民の森」ができました。都市部の人が森林の手入れに訪れ、楽しく交流しています。

それだけではありません。環境に配慮した暮らし方、エネルギーを効率的に利用できるよう情報技術を活用したスマートシティへの関心が高まりました。太陽光エネルギーや電気自動車の利用も広がっています。

気仙沼では、震災の前から「森は海の恋人」の考えのもと、自然とのつながりを大切に守り育てている人々がいました。震災を機に、気仙沼らしさの原点は自然と敵対するのではなく、共生することだと考える人が増えました。自然に寄りそい、暮らしや産業の隅々にまで環境配慮が行き渡り、気仙沼の取り組みは世界中で知られるようになっています。

新しいものと古き良きものが調和するまち

津波で大切にしてきたものをたくさん失いました。けれども「本当に大切なものは何か」を多くの人が考えるようになりました。震災を経験したからこそ、気づいたことがたくさんありました。

震災直後は携帯電話などの情報機器が十分に使えませんでした。かわりに壁新聞や掲示板などが役立ちました。また、水道が止まっていたとき、小川の水や井戸にずいぶんと助けられました。

この経験から、最先端の技術を活用しながら、古くからある技術や道具も残すことになりました。技術や道具に頼らずに生き抜く力を学ぶことも大切なことだとして教育に取り入れられています。

震災で続けることが危ぶまれた郷土芸能も見事に復興を遂げました。新しくできたホールでは、たくさんの趣味や文化の催しがあり、新しい文化が生まれつつあります。

おじいちゃん、おばあちゃんの知恵や経験が若い人たちに引き継がれました。若い人たちはこぞっておじいちゃん達がもつ技能を学ぼうとしています。世代をこえた交流が根づき、ひとり暮らしのお年寄りでも安心して暮らせるようになりました。あたたかい見守り活動がずっと続いています。

移転して新しく建てられた市立病院では食と健康が結びついた医食同源のまちづくりが進められ、誰もが元気に暮らしています。

気仙沼もっかたり 2021

気仙沼市震災復興市民委員会

わたし（わが家）のふっこう計画

シンポルイベントに
招待したい人

（　　）（　　）（　　）（　　）
（　　）（　　）（　　）（　　）

復興シンポルイベント

Invitation Ticket

平成24（2012）年3月11日発行

スロー・フィッシュ・フェスティバル 2021ご招待券

本委員会では「スロー・フィッシュ・フェスティバル」の平成33（2021）年開催を目標に決めました。それまでに「全国豊かな海づくり大会」の開催も考えています。一人ひとりの復興がまちの復興につながると信じて、震災前よりもいいまちになるよう、ともに歩んでいきましょう！

有効期限：平成33（2021）年12月31日まで

●スロー・フィッシュ・フェスティバルとは…
海にスポットをあてたスロー・フード運動のイベントで、2004年にイタリア・ジェノバで第1回が開催されました。
スロー・フード・フェスティバルは世界各地の伝統的な漁業や魚食文化の紹介のほか、試食や販売の見本市的な要素もある国際イベントです。

未来は、あなたの手の中に。

この委員会は気仙沼市民と出身者が集まって震災後のまちづくりを話し合い、平成23年9月に提言をまとめました。本紙はその提言を物語風に要約したものです。専門的な裏づけがない話もあります。すでに進んでいる話もあります。震災から10年後、みんなが幸せに暮らす姿を想像しながらぜひご覧いただきたいと思います。

いま、ひたすら前を向いて歩いている人がいる一方で、大切な人やものをなくして心の整理がつかない人もいます。このような時期に夢の話を語ることに賛否もあります。しかし、私たちはみんなで同じ夢をもつことで、同じ方向を向くことで、気持ちをひとつにしていきたいと考えました。みなさんお一人おひとりの復興がなければ街の復興はありえません。一人でも多くの方が、前を向いて歩むことができるよう心から願います。

2021年を笑顔で、皆で迎えられますように。

気仙沼市震災復興市民委員会

www.city.kesennuma.lg.jp/www/fukko_shimin/

このパンフレットは「東日本大震災復興を支援する柏市民の会」のみなさんから支援をいただき発行しました。

編集協力：三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社

市民委員会プロジェクト

1. **気仙沼市緊急産業復旧 プロジェクト**
水産業をいち早く元に戻して、前よりも競争力のある水産業をつくる

2. **世界一の魚市場 プロジェクト**
水揚げしやすさ、使いやすさだけでなく、観光地にもなる魚市場をつくる

3. **造船・船用工業界の集約と連携（造船団地）プロジェクト**
造船所や船づくりに関わる産業の団地をつくる

4. **環境と防災に配慮したフォレストベンチ工法活用 プロジェクト**
コンクリートによらない工法で、災害に強くて緑の多い斜面をつくる

5. **気仙沼市再生エネルギー導入 プロジェクト**
太陽光や風力、バイオマスなどの再生可能エネルギーの導入をめざす

6. **三陸リアス・ジオパーク プロジェクト**
三陸の自然の記憶を伝えるため自然公園の認定をめざす

7. **セントラルパーク整備（ユニバーサルデザインの公園）プロジェクト**
災害に強く、お年寄りも子ども利用しやすい公園をつくる

8. **商店街および中心市街地再生 プロジェクト**
新しい商店街の計画をみんなでつくる

9. **特区活用漁業再生振興 プロジェクト**
国の制度（特区）を活用して、漁業がいつまでも発展できる作概会議をつくる

10. **文化芸術芸能再興 プロジェクト**
地域の文化や芸術、伝統芸能をふたたび興すと同時に、新しい文化をつくる

11. **防災自然公園ベルト「海の照葉樹林」プロジェクト**
津波や災害を防ぐために、海岸にやぶ椿やタブノキなどで照葉樹の森をつくる

12. **水源の分散化（安全な水辺づくり）プロジェクト**
災害があっても水だけは確保できるようにする

13. **復興住宅整備 プロジェクト**
地域や住む人に合った復興住宅をつくる

14. **企業・大学・研究機関誘致強化 プロジェクト**
会社や大学などを気仙沼へよんで、一緒になって新しい技術や産業をつくる

15. **観光メニュー開発 プロジェクト**
新しい観光の目玉やコースをつくる

16. **NPO・NGOとの積極的協働 プロジェクト**
全世界のさまざまな団体の強みや経験が、復興に役立つ仕組みをつくる

17. **情報発信改革 プロジェクト**
災害時、みんなにすぐ知らせる方法やふだんでも連絡しやすい仕組みをつくる

18. **復興シンポルイベント開催 プロジェクト**
復興の節目ごとに目標となるようなイベントをつくる

安全で災害に強いまち、弱者にやさしいまち

気仙沼では「海と共に生きる」「津波は来るものとして受け止める」と考えました。道路や鉄道、河川、護岸の整備には「減災」の考え方が取り入れられました。海沿いの地域では津波でも安全な家が建ち、お店もできました。震災前よりにぎやかで、風情のある港町に生まれ変わっています。

地震があると、防災無線ですぐに避難の呼びかけがあります。近所で声をかけあって一次避難所へ向かいます。避難所には「情報ボード」があるので、いまどうなっているのか、誰がどこにいるのかすぐに分かります。

さらに高台への通路ができて避難しやすくなりました。波状にくねった手すりは持ちやすく、おばあちゃんも楽ちんです。がれきで道路がふさがっても、建物の屋上をつたって高台へ逃げられます。訓練をしっかりとしているので、地震があっても誰もがすぐに安全な場所へ避難できるようになりました。

海沿いには500m間隔で津波避難ビルがあり、働く人も安心です。

自動車での避難については話し合いが行われました。どの道路を自動車避難専用にするか、そのルールが決められ、訓練もしっかりと積み重ねているので、スムーズに避難できるようになっています。

忘れなくてもやってくるのが災害です。地域のみんなが協力して、備えを高める工夫は続きます…。

自然と産業が調和するまち

気仙沼は昔から自然の恵みを受けて発展してきました。海と山、両方の幸が近くにある場所は日本でもそうそうありません。

とりわけ海は特別です。水揚げから水産加工、漁船の製造修理、えさ、燃料、食料の供給まで一ヶ所でまかなえる全国でも珍しいまちです。

この水産業が、震災で大きな被害を受け、いち早く立て直すことが一番の課題でした。産業界と行政が一緒になって地面を高くしたりして緊急工事が行われました。そして冷蔵庫、冷凍庫、加工場が再開しました。

その後も効率のよい水産加工や造船の団地がつくられたことで、機能的な「世界トップレベルの港町」へと再生しつつあります。さらに災害に強く環境に配慮した分散型の排水処理設備が使われ、自然と産業との調和も進みました。

道路もずいぶん整備され、大島と橋でつながっています。三陸海岸は高速道路で一気につながりました。世界遺産の平泉とリアス式海岸の景観や海の幸を味わおうと観光客が押し寄せています。それだけでなく、震災の経験を活かした「防災教育」や自然との共生を学ぶ「環境教育」、復興への道のりが分かる「地域再生観光」で多くの人が気仙沼を訪れています。

復興の目玉として気仙沼魚市場が整備されました。水揚げ量や金額はもちろん、使いやすさや観光でも「世界一の魚市場」になるよう整備したおかげで、水揚げもお客さんもひっきりなしです。

震災から10年、一人ひとりが復興をなしとげつつあります。自然と産業が調和することで、先人が大切に育ててきた「気仙沼ブランド」が守られただけでなく、さらに新しい価値をうみだしています。勢いが止まらない気仙沼に、他の港町や産業があこがれるほどです。

コミュニティ、集落を大切にするまち

気仙沼には市街地や漁村集落のほか、農村と山が折り重なる中山間地域もあります。山が海までせまる地形のリアス式海岸は、小さな漁港が多いのが特徴です。そこでは集落ごとに「おすそわけ」や「見守り」など豊かできめ細かい人との関係が形づくられていました。

しかし、震災で慣れ親しんだご近所さんと長い間離れ離れで暮らさざるをえませんでした。

仮設住宅へ入った頃、お互い顔見知りではありませんでした。けれども支援団体の協力や仮設住宅の自治会ができて様々な交流行事が催されました。

仮設住宅の整備が終わり、復興住宅や集団移転など定住場所が整備されました。集団移転する集落では、これまでの近所づきあいが維持できるように住民みんなで話し合いがおこなわれました。

その後、農地や高台の土地を活用して住宅が建てられ、自分たちの力で再建が進みました。

自力で家を建てることが難しい人たちには復興住宅が整備されました。

しかし、ただ家を建てただけでは町にはなりません。地域の絆づくりのために、セントラルパークや多機能公園、集会所をそなえた福祉施設など、多くの人が集い、交流する空間や祭りが増えました。

震災から10 年がたち、気仙沼の人たちのお付き合いは、時代の変化に対応しながらも、しっかりと暮らしに根づいています。

自然も産業も歴史も震災も復興も、子どもたちに受け継がれるまち

平地の少ない気仙沼では、校庭や主だった公園には仮設住宅が建てられました。自由に走り回れる場所がなくなって、大人は子どもたちが不安やストレスを抱くのではないか心配しました。

けれどどうでしょう、大人よりたくましいではありませんか。震災を乗り越え、まさに「生きる力」を実体験して成長しています。さらに世界で活躍する人を招いた「ドリームティーチャー」教室や、劇やダンスなども活発になって、みんなに笑顔が戻ってきました。学校ではカウンセラーがきめ細かな心のケアをほどこしています。

また、仲間が一定人数いたほうがよいとの考えから、小・中学校の再編・統合が検討されました。

震災後しばらくたって、気仙沼の歴史や文化、震災の経験、復興への挑戦などを、次の世代へ引き継ぐ取り組みがはじまりました。リアス・アーク美術館では、地域のなりわいと食文化、伝統芸能の関係をより学ぶことができるようになりました。そして、震災の記憶を残すメモリアルパークをめぐると、語り部から震災の体験を受け継げるようになりました。これらは「気仙沼の内」をみつめることで、自分が何者かを知る手立てとなるでしょう。

逆に「気仙沼の外を知ることも大切」との大人たちの願いもありました。そこで子どもたちは毎年、国内や海外の地域を訪れ、様々な人々や文化とふれあい、貴重な体験をしています。気仙沼の外を経験することで、他の地域にない気仙沼の良さに気づき、ふるさとを支える人材として大きく成長しています。

外を知ることで、気仙沼で育つ子どもたちには立派な軸足ができました。進学や就職で気仙沼を離れても、いつもふるさとのことを誇りに思う人材が世界で活躍しています。

人口、産業所得規模が震災前同等規模以上のまち

震災で人口が減り、税収も落ち込みました。震災が起きた頃は、暮らしの土台になる働く場所をつくることが大きな課題でした。そして復興計画を考えるとき、目標となるゴールをつくることで全員の気持ちを一つにまとめることにしました。それが「人口、産業所得規模が震災前同等規模以上のまち」を目指す、ということです。具体的な裏づけやできる可能性があったわけではありません。でもそれが「復活した！」と胸を張れる水準としました。

目標ができたことで、会社の社長さんは事業再開の方針がたてられ、働く場所をもう一度つくろうという気持ちになりました。市役所は何をどれだけつくれば良いかはっきりして、工事のスピードアップにつながりました。お父さんやお母さんたちは、働く場所が再開したり新しくできることでめどが見えてきました。復興が進むにつれて、いちど気仙沼を離れた人たちも戻ってきました。

復興への動きが粘り強いものとなっているのが、市民、産業界の方、市役所との対話でした。たくさんの問題がありましたが、みんなの目標が一つになりました。「それなら私もがんばろう」と思う人たちが増えて、前を向く人たちが年が経つにつれて増えています。

復興するにはお金も必要でした。財源も、情報発信をすることで継続的に多くの支援を得ることができました。気仙沼は世界中の人々に支えられて歩んでいます。「気仙沼は復活した」と胸を張れる日もそう遠くないでしょう。

復興の仕上げで開催されるシンボルイベントのカウントダウンまであとわずかです。

世界に開かれた、世界に開いたまち

気仙沼はグローバリゼーションを先取りした町です。なぜなら遠洋漁業を通じて昔から世界とつながっていたからです。それだけに、世界の水産資源をめぐる動きや国際社会の変化を肌で感じながら暮らしてきました。

震災直後、世界中から支援の手が差し伸べられました。多くのボランティアや支援団体の皆さんに励ましをいただきました。その交流は10年たっても続き、「気仙沼“志”民証」を持つ人々が世界中に広がっています。

フェイスブックなどインターネットを通じた海外への情報発信を強化したことで、気仙沼は世界の人々とさらにつながりを深めました。

震災で大きな痛手を受けた水産業は、関係する人だれが欠けても復興はなしえませんでした。目前の壁を乗り越えながら、何十年も先を見通す計画を立てました。市長のトップセールスも功を奏しています。地元企業と手を組んで新しい技術や商品を開発する企業や大学や研究機関も気仙沼へやってきました。企業と大学で一緒につくった製品を海外で成果をあげている地元企業も見られます。

また、三陸縦貫自動車道が整備され、仙台空港からも便利になりました。観光や交流のメニューが増えて、一夜泊まりよりも二泊三泊と長く滞在する人が増えています。水産業や津波災害の研究や観光で気仙沼を訪れる人は絶えません。

私たちの復興への想いに、多くの人々が共感しているようです。気仙沼は、今もなお世界から応援され続けるとともに、復興への歩みを世界に発信し続けています。

お洒落で格好のいいまち

津波により壊滅的な被害を受けた気仙沼ですが、復興計画の副題に「海と生きる」を掲げ、世界一の港町をめざす夢が語られました。

それがすべてのはじまりだったのかもしれません。

景観がととのえられ、玄関口となる駅から港までのまちなみは心躍るものとなっています。食をテーマにした施設が整備されたり、港町ならではのエリアが少しずつ姿を現してきています。レストランのテラス席から港に目を向けると、様々な船が行き来しています。その眺めはまさに世界一。新鮮な三陸の海の幸を楽しみながら、日本人だけでなく外国からのお客さんも語らっています。

最近、新たな魅力となったのが造船所見学です。訪れる人はみなスケールの大きさと、技術力の高さに感動しています。このようにして海のそばは昼も夜も人で賑わっています。

市内のある漁港では、集落で漁村レストランを開業しました。新鮮さだけでなく、あたたかいおもてなしにお客様が何度も繰り返して訪れています。ここは直売所と並ぶ人気スポットになりました。

震災のあと、「世界一の港町」を目指して、一人ひとりができることを積み重ねたことにより、多くの人が訪れ、世界中の人たちが憧れる港町となりました。いきいきと働く大人たちをみて、気仙沼で働きたい若者も増えていきます。

「世界一の港町」づくりに終わりはありません。楽しみながら、夢をもって一歩一歩前へこれからも歩んでゆくことでしょう。